
散歩

一言 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
散歩

【Nコード】
N1387J

【作者名】
一言 真

【あらすじ】
文字通り散歩の話。文学寄りの短編小説。

彼は玄関の段の上に腰を下ろして、茶色のウォーキングシューズを履いていた。右手の指を、靴と自分のかかとの間に挟み込み、しっかりとかがとが靴の底についたことを確認すると、彼はそこから指を離して立ちあがった。

彼はリビングの方に振り返り、「行ってきます」と言った。すると、リビングのドアが開き、姉の顔がそこから傾いて現れ、

「行ってらっしゃい」

と一言言う。彼は頷いてドアのノブに手をかけ、それをひねった。ドアが開き、そこから夜気が滑り込んでくる。

彼はドアから外へ出ると、一目、玄関先の景色を見やり、そのままポケットに手を入れて鍵を出した。そして、顔を背後の玄関先の方へ向けたまま、鍵をドアに差し込んで、閉める。

彼は再び鍵をジャケットのポケットへとしまった。そうして、片手をポケットに差し込んだまま、もう片手を反対のポケットに差し入れる。

彼は両手をジャケットのポケットに入れたまま、門の小扉に近付き、足でその門を蹴かんぬきってこじ開け、そこから道路へと降りた。

彼はもう一度小扉の方へ振り返り、ポケットに手を入れたまま、足だけで小扉の門かんぬきをしめる。

彼はその動作を終えてから、ようやく道路を歩きだした。

その道路は、左右を民家に挟まれていた。彼は、お隣さんの家を見やった。その家は、門から玄関までの距離が長く、その間にある庭が、とても広い。花花を植えた植木鉢が、塀に沿って置かれ、その先には、ガレージがあつた。

その家のガレージは、車庫がなく、ただ、剥き出しになっているコンクリートの敷地内に、車を止めるだけのものだった。

彼は、お隣さんの家から視線を外した。

そうして、道路の先に見える、電化製品専門店の方を見やる。それから、ゆっくりと視線を上へ移動させ、黒い空をみやった。

今夜も、星星がきらめいていた。彼とその姉がここへ引越してから、彼がよく思ったことだが、この土地は星がよく見えるという特徴がある。点々と見える星には、かすかに色があった。赤っぽい光を映すものがわずかにあり、大体は白っぽい色をしていたが、どちらとも美しくよく輝いている。

彼の歳は、十八だった。今は、高校三年の秋だった。

受験を間近に控え、彼はよく受験勉強の間の息抜きとして、近所を散歩した。星のきれいな今夜も、また同じように、息抜きとして歩いている。

彼はふと、右手を背後へ伸ばし、首の後ろのあたりに当てた。そうして、その格好のまま、電化製品専門店の方を再びみやった。

彼の視界に見えるのは、専門店の裏側だった。専門店の入口は、彼のいる通りとは反対側の通りからしか見えず、駐車場もそこにある。

専門店は、毎日二十時に店じまいをする。とても大きな店で、大型スーパーほどの大きさがあり、三階建てだった。駐車場は、一階にあり、二階が電化製品、三階が携帯電話、パソコンなどを売っていた。

こうして近くに電化製品専門店があると、便利ははずだが、彼はあまりこの店を利用することはなかった。先週、イヤホンを購入する為に入ったが、その一回だけである。

彼は、専門店の目の前まで来た。そこには、彼の歩いてきた通りを真横に分断する道路が走っており、その先に電化製品専門店はある。彼は、その道路へと曲がり、また歩き出した。

そこでふと、彼は、首の後ろに置いていた手を、ぴんとまっすぐに伸ばした。そして、ボールでも投げるように、腕を前へとぶんと振った。それは、何となく意味もなく彼がした行動だった。

彼は、黒いジャケットの下に、大きめのTシャツを着ている。そ

のTシャツは、黒と白の二色で構成され、腕の部分が黒、腹の部分が白に塗られ、胸のあたりには骸骨のプリントが入っていた。そして、彼はジーンズをはいている。そのジーンズは、黒っぽい色をしていて、彼がこないだ買ったばかりの、新品のものだった。

彼はそんな服装で歩いていたが、周りの景色が先ほどの景色より、がらりと変わっていた。

今、彼はオレンジ色の街灯の光が、アスファルトに降り注ぐ一帯を歩いている。そこは、文字通りオレンジ色に、辺りが薄く色塗られ、彼の顔も、同様にオレンジ色になっていた。

彼の歩く歩道の横には、白いガードレールが走り、その横に道路が伸びている。

彼は、大きく腕を振って、大股で歩き出した。

彼は、今神社の中にいた。その神社は、彼の歩いていた道路から、茂みの中の小さな階段を上つてすぐの所にある。

神社のあるこの山は、電化製品専門店から二キロほど離れたところにあり、彼はこの神社を散歩のコースの終着点として、いつもの習慣としていた。

神社の名は、三雲神社と言う。赤い鳥居が階段の頂上に配置され、それをくぐると、狭いスペースの中に、小さな祠があった。彼は、その祠の前で、手を合わせて、少し目を瞑る。その後、祠に背を向けて、鳥居をくぐった。そこで、ふと足を止めて後ろへ振り返り、もう一度神社の境内を眺めた。しかし、すぐにまた前を向く。

そうして階段を下り出した。階段は、くねくねと蛇行している。階段の一段一段は、土できており、その先端には木の杭が五つ食い込んでいた。

彼はその階段を、のそのそと降り、そして、再び道路の歩道へと降りる。

そうして、彼は来た道を、引き返し始めた。

その道路は、とても静かで、車も通っていないかった。彼の歩いている歩道の横にはすく、茂みがあった。彼の歩いている歩道とは、反対側の歩道の横には、駐車場が連なり、その先には民家がある。

彼は、鼻歌を歌い出した。それは、彼の好きな洋楽の、ロックンロールの歌だった。

彼は、よくロックを聴いた。彼が好むのはロックで、彼の所有する白い？Podでよく聴いていた。

授業の合間や、家にいる時によく聞く。しかし、今、彼はipodを持ってきていなかった。

彼は、散歩の間と、登下校中には、決まってipodで曲を聴くことはなかった。聞くのは、前述の時だけである。

彼は、鼻歌を歌いながら、再び、先ほどしたように大股で歩き出した。

彼の履いている靴は、彼の足にフィットしておらず、少し大きめだった。そのために、彼はこうして歩いている途中に、かかとと、足の横に痛みを感じていた。

彼は、ふと足を止めた。足の痛みが気になったからだだった。

彼はそつと前かがみになり、足を靴から引き抜いた。しかし、すぐにその足を靴に戻し、前屈みにしていた上半身をまっすぐに立たせた。そうして、彼は、再び歩き出す。

彼は再び自宅へと帰ってきた。そうして、小扉に近付いて、今度はちゃんと手で、門かんばんを開く。そして、扉を抜けて、門を後ろ手で閉じた。彼は、ドアの横の壁についていたチャイムを押した。

すると、しばらく経って、人の足音が家の中から聞こえてきて、そのままドアが開いた。

ドアの隙間から、彼の姉の顔が覗き、言った。

「おかえり」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1387j/>

散歩

2011年10月5日02時43分発行